教育新聞

教育を変えるファクトがある。

コロナ禍の女子高生、約3割が孤独感、休校が影響か 近畿大

玉村 勇樹（教育新聞記者）

2023年4月27日

近畿大学東洋医学研究所（大阪府大阪狭山市）の武田卓所長らの研究チームは4月27日、コロナ禍において、約3割の女子高生が孤独を感じているという研究結果を発表した。中でも、コロナ禍初期の2020年に入学した生徒は割合が高くなっており、休校などにより、人間関係の形成がうまくいかなかった可能性を指摘している。

研究チームは調査の背景について、「感染予防による社会活動の制限によって、以前よりも孤独感が増していると想定される。パンデミック初期の調査からは孤独感と自殺念慮との関連性が報告されており、深刻的な心理的苦痛は自殺の明らかなリスクになる」と説明。続けて、ストレスに対して、特にぜい弱である思春期女性における孤独感の実態とその関連因子は、これまで検討されていなかったことを挙げた。

調査は21年12月中旬、仙台市内の2つの高校の協力の下、女子生徒1450人を対象に行った。孤独感に加え、心理的苦痛や新型コロナウイルスへの恐怖度、月経前症候群症状を評価。なお、調査時には、高校は通常の対面授業が行われており、社会生活に大きな制限もなかったという。

広　告

『Society5.0時代の教育を考える～子どもたちの可能性を広げる学び～』特別座談会

【協賛企画】Edv future株式会社

調査に回答した生徒の中で、月経周期が規則正しい907人を解析したところ、29.0％が孤独を感じており、高校2年生に限ると、35.1％と割合が高くなった。加えて、深刻な心理的苦痛を抱えている人が8.2％と全体的に高く、孤独を感じている人の場合16.0％とさらに高くなった。これらの結果から、研究チームは孤独感に関連する因子として、「インターネット使用時間」「心理的苦痛」「月経前症候群重症度」に加え、「高校2年生」も挙げられるとした。高校2年生は現在の大学1年生に当たる。

研究チームは結果について、「孤独感が特に高かった高校2年生は、コロナ禍初期の20年4月に入学した学年であり、高校入学という社会的変化の大きな時期に緊急事態宣言などによる休校が重なり、新たな人間関係形成がうまくいかず、その後も継続して孤独感を感じている可能性がある」と指摘。思春期女性が特にストレスに対してぜい弱であることを踏まえ、医療従事者や学校保健関係者は特別な注意を払う必要があるとまとめた。

また、研究チームによると、ストレスが原因の一つである生理不順の生徒の割合が、19年は6.7％だったのに対し、20年は15.4％と上昇。21年も15.1％と高水準で維持した。これを踏まえ、武田所長は「コロナ禍が収まりつつあり、ストレスはなくなっているという風潮があるかもしれないが、持続している可能性が高いことが示唆される」と述べた。